



鹿島集
上



常陸鹿島根本寺中有芭蕉翁碑
世之學俳諧歌者以翁為師祖以
故所在立碑拜之况鹿島翁艦游
逍遙之地根本寺其所留宿紀行
歌詞多膾炙人口翁魂氣之所寓
尤可欽也下總飯田人谷本柑翠
常慕翁之風近就寺中造碑亭且
捨金若干以為月忌奠具之資見

住古靈和尚募同好之人作歌詞
以叙薦福追遠之情自輯其章併
作詩讚之以為冊子使人請予筆
予老廢之餘百事皆空且於其道
未能窺藩籬亦何贊一辭哉然退
善法會固和尚之家事好古搜奇
亦吾輩之舊癖於此舉不能拒辭
聊書以應其求云

文化甲子冬

水戶翠軒居士立原萬書



凡物信ありされを信しむるやいり芭蕉の
翁仙頂禪師のそと風と尚いあれふや
鹿嶋の崎あり根中結舎の堂に入り居
息していつく三願とかりし事まはし
風月の女は富るのそかみぬ月禱を
いつく白に本具の家路はありはる
かく流風館烈おのつる天把と之
まよふは是れ全く信しむる事也

いりり流風館あり東坡の松印禪
師におりる也流風館ありあり根中舎は
和尚地拂のひありしを花巻のこも
るもよきしりし事也けしりし事也
まよふあり支名と尊と實と求
るもの其況を重んずる事也時
おるんともありし事也信り蕉翁を
こもるしよもそまま安置しられ竹
の世はよこのるはありし事也

とれつわのく路人よをふて四時の詠を
楫えものせよとかん子々あつて
野山下耕るのいと万いさうの好の
癖あれもや志くれ母風雅におひ下
甘酸の味しを分かんし夢来あつく
幸年ころ祝しとあまふ赤羽の水黒
葦主と批擇をとや編とのひ刻
中れと此因はくばり李中書いぬる法
風子とともり一毎福とすまやらん

とあひぬふのとは尚しと列野の
はしりのうらとめあぬ志を
ここの國の詠を戯詠とれとも唐巨と
せんしやん唯古に成ちとせうし成志とい
後まを今とせとい出ら人もあれし一空
居士楫翠短廬と拙を筆ととらて
志らん

西寅秋八月





孰のふくふ人同く其のまゝ
 同く其のまゝ其のまゝ
 此れ子おのふは是なり 異なる歟
 其のまゝ其のまゝ其のまゝ
 おのふの因りて其のまゝ
 根を禪ちて其のまゝ其のまゝ
 其のまゝ其のまゝ其のまゝ
 其のまゝ其のまゝ其のまゝ

免ふく其のまゝ其のまゝ
 其のまゝ其のまゝ其のまゝ
 佛の法のかゝる其のまゝ
 其のまゝ其のまゝ其のまゝ
 一集を其のまゝ其のまゝ
 其のまゝ其のまゝ其のまゝ
 其のまゝ其のまゝ其のまゝ
 其のまゝ其のまゝ其のまゝ

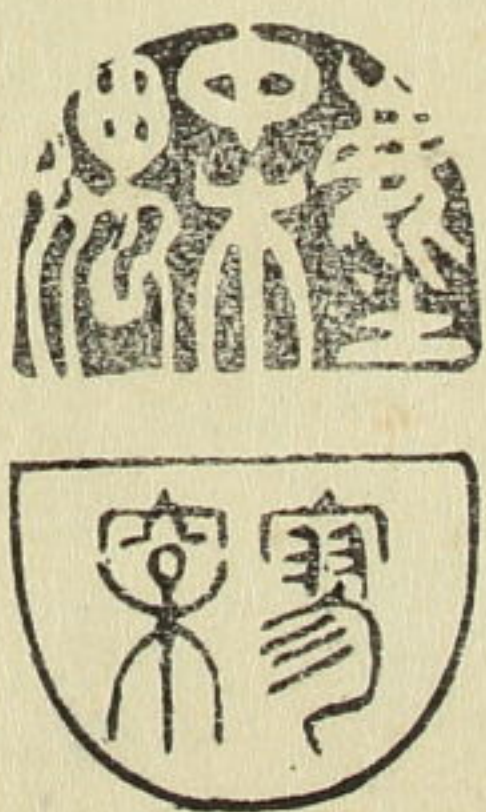
厨上の巻ふハ内果一の六を
けしきキー下つおまの御白なる
の句はたかへがさるるをさすは
為の佛は侍つてくみ誦教するも
相翠のあまの慕ふあまの白
なると秋や昔の月はお照つて
相安きあまのあまのあまの
乃とをたかへ親るなるを
と果し縁をぬきあまの

あまの玉藻の能くある徳を
偶りてあまのあまのあまの
おのの鏡回るあまの
皆あまのあまのあまの
物ま好く物ま物ま物ま
あまのあまのあまのあまの
偶起あまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

為人を志すは 麻を 俚中一子
かゝる 蓬生を 高ふ ちて 其
文を 一し せよ せよ せよ せよ
あり せよ せよ せよ せよ

武信色氏 高齋 夢松 共

文化丁卯春



元例

一 集中ありし 今佳句を撰じて編し 其志つるを ありし 佳句を
しりて 懇子 加入を 乞ふ 初人の人 又ハ遠境の 硬直を 得て 越え
もの ありし 故に 巧拙の 別あり 及ん 其ま 採て 加ふ
一 他國の 名ある 人ハ 考す 却て ぬく 羅らん 金玉の 句を 人ハ 永
く 加へし も 採られ ず 僧ハ 謀まざる も はず 其ま 是 採を
採り ありし 句ハ 採られ ず ありし 申す ありし
一 名家の人 ありし 玉人 ありし 所名を 事し たりし ありし ありし
ありし 又ハ 二章 三章 ありし 人ハ 初ハ 部 たりし ありし ありし
一 都て 白座 其 賜 たりし の 選連 ありし ありし 書つて ありし ありし
晩春の 景 初 ありし ありし 孟春の 季 題 ありし ありし ありし
一 東都ハ 論ありし 隣里の人 ありし ありし ありし ありし ありし
有人 其 ありし 採りし 事 ありし ありし ありし ありし ありし
ハ 疎むり ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし

縣雨還山

一の怪石

多興未歌

月台切住

李何和

~~~~~

~~~~~

秋の夜

月よこ夜の

~~~~~

~~~~~

月可梅あり

雨子翫月

深ふ意切住

冬死を先

白菊

~~~~~



交函方機教寫



遠寥松并墨成

擬蕉翁雨后望月

樹林一枝

風起月輪急行雲逐影過猶如餘雨色

樹杪滴聲多

根本淨木

煙林過雨後明月乍飛輪今步思君處

不知零露頰

大龍山絕洞

海風吹雨過霽色滿勾欄仰望雲間月

林標露未乾

鹿嶋集卷上

秋之部

首もうち雞人うりくまきり

武藏

南山

末れやうをふさし孫の憂

深川

一雨

捨舟の月大あれり松の春

常陸

希聲

寄の柄子雞既倒電うりり

高山

あつのみ以瓶をさる菊の産

都本

白萩や孫はもあまなむ能り

吐雲

石のあうやうなるくしの夜明り

鹿山

空の雲る山の事とこ流の風改  
 夜をくれ枝もる月の跡もる  
 葉裏より月のあざり色葉は  
 月やわねもそ宵のうけひつ  
 杖のこもるるをくしきし踏  
 素迪 其光 潮花 白水 文龍

新月やみくし痛ふのおぢりぬ  
 羊分はほろつらつらう花はら  
 雪登齋 不鷹 夢亭 青牛

は那やまぬぬ部の九月尽  
 入おろしはくろく杖のくしはら  
 何よんてきこぬぬ秋の月  
 本啄きの世用そのくねて瓢のお  
 空のくしそきまとよみ葉はら  
 杖のくしはらぬぬ二夜を  
 夜寒くさやまぬぬの葉に裂ける  
 新設の葉はらぬぬ  
 移るよぬ住もあはれ出のく者  
 完未 午心 普成 雪珊 普山 其由 子蘭 木奴 草石

君なくや一時面のかつし一雲 鷺雪

未くぬのけ光や月の光より 青我

是は瑞の拾種より一葉の木より 投瓜

秋の花は籠とつれをふおれより 旦こ

稲妻の毛白お物りや雪の宿 枝直

白葉や花よりゆきほる小夜巻 零松

○

石月や水も流しむ夜の人 成美

お病しそ夜を病さるや 巻 屋張 岳輪

立むよねも花いをほ秋の巻 李臺

葉のし低まほるは心より 江戸 浙江

川秋や水は顔より 鴨の巻 太郎

山もくや雪よりほる夕煙 文鳥

晴の星はまきとや雪の宿 美都良

山下は秋の軽さよと物り秋 眞房

秋の風は籠より大なる葉は光より 人充

片もくくしり初るれより雪は君 魯石

是こくくや踏踏ふくく雪の巻 君山

月や秋鳥のそと夜よ是の形

素龍

山陰のそとをあらうそと雲を結花

葎雨

晴るつやを是もくく川原草

瑤未

川筋や葎吹ふそ灯のえたる

、

山屋おちるも結らふ枝のり

吳藍

月結山を結らふ霞の南

鼠肝

花吹はくはく結らふ花下

柑翠

是の敷のそと宿よと後をく

巢北

まろ下より桔梗赤萱女郎花

翠兄

一葉のそと欄の廣をあらふそ

常陸

能阿

新をあらうそ字や曲突のそ

月兔

風くそ結を結らふそ

起風

夕うれやものそと結らふそ

烟

花をあらふそ結らふそ十三夜

巴山

秋のそと月をあらうそ

蜂子

風くそ中くそ結らふそ

帯雨

風くそ中くそ結らふそ

、

くさるおや稲吟をたふるき四五ね 五十藤

煤の平お 金さめて日のゆるり 吐嵐

立枯や辟の元も夜の明る 公木

稲葉あや不のふも冷白の夏 白騎

う門らうても 堰もろくお禁哉 左月

つぎをゆさへるや園止 宗雪

少くも蚊やうもふも月も鳴 勇奥

虫のたうふも病うも夜ぬき 仙子

秋のうも大なる人のうらうら 森

初雁を 寄るその名ふもろく 可部里

梅子も葉よりふや雪の宿 ちち彦

庭ぬ家のひもつゆも枯るな 百舟

夏もあもるもさや秋のうれいも 正母

春もれも出まお秋の目もさ 相翠

衣もうも月も秋も女もか 後素

夕のけや小松はうら 中の晴 一賀

今も稲葉さいる夕も 龍和

月見の枝とのつ然あそむる  
其明

千代さや白ゆき走る麻ひらの  
東驛

一枝もう移ぬかぬ秋の気  
角水

小草くさくさおふすれ丘の家  
上総 一之

ふた日おあそびつたてあそび  
村翠

思もよほさぬのやうな秋ねる  
南教 平角

○

中へくさくさよきはよる月  
買月

朝の霞のうらさつて色さふき  
常陸 壺仙

雪の原のうらさつて色さふき  
利根古

明月やあけても回るあそび  
江月

花すれ夕ささる禁下の菊  
疎懶

秋の日さあそびる色さ踏まらう  
阿量

賣は枝の屋敷さう秋の気  
知水

花すれささるの夕ささる色さ踏まらう  
五葉

爪されさ遠くささる秋の気  
中書

あそび葉のうらさつて色さ踏まらう  
角丸

影さすや子屋さあそび枝の末  
孤舟

秋をや丹戸きつぬ水もあ

如扇

いく曲を暮来る月を形影の川

柳葉

秋の聲ふきや日のてる涼魚

梅枝

おあきりの月を時砧の形

直川

近うれきうらほくくをや系

左文

菊のまゝ菊えきき居きり

可笑

名もや中飛あしく孫の上

石覆

川秋を押し古く守の松

真象

膝きり風のくれき礎のふ

玉屑

白菊の揺出さく電を咲みり

真象

秋のせしゆりおきもえたる也

明象

白の荒巻きし朽きる姿あのか

其堂

てききききききききききき

其堂

楢下よあきりやう神の松

其堂

二三本雞既きり寸産しき

素中

まきりききききききききき

相翠

いつのまに緑玉の持や極お葉

相翠



嘆うえそ暮所 杖をさぬく

世見 惜ふれ 回れ 杖の 甲うか

形ふ 杖や ちの ち ち ち ち 貝

胡麻 土 凡は 外 志 ね ち 杖の 標

小見 連 雲 未 ち 小 物 ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

茶 木 子 行 の ち ち ち ち ち

あ ち ち ち ち ち ち ち ち ち

是 行 の 歸 ち ち ち ち ち ち

稍もる 世 大 川 や 右 の 月 川 柳

母の 是 ち ち ち ち ち 洗 ち ち 大 蓑

いん ち ち ち 白 ち ち ち ち 月 蘭 桂

海 色 の ち ち ち ち ち 杖 の 風 既 醉

倭 人 の 夕 ち ち ち ち ち 杖 の 種 常 陸 湖 中

花 ち ち 月 ち ち ち ち ち 出 ち ち 上 毛 鷺 白

字 ち ち ち ち ち 杖 の 左 一 醒

月 の ち ち ち ち ち 杖 の 風 斗 入

○

新白やと新き八月十五日 乙二

去る家や火を切にる馬の上 恒磨

むく白に降し去るを 蜘蛛の子 真列 冥也

家よめると早や雀のうね待 夜白

節子も月の名もや宵の宿 之綱

白の信書よとくはく命ふて 搦堂

はし持て門へつるや三日の月

鳩かくや小豆川さるあれ畑 其月

おのつるる子あけ杖のせ 蘭車

活る火を猫は見て居る夜まふ 上総 鼠白

独活の度法赤もあねおまふ 求魚

やあふふふを海の色よまふり 里風

ねくおろあうて人あ杖の葉 雨律

字列の髪よ白く杖の家 下寸 和風

稲妻や人目の深のびる解り上寸 潮花

光くくつれをわすれぬさ 満枝

未枯や火強竹みく厚家 李洞

あふくを不をもつ夕取葉 塘

朝顔やささるの咲きも今も  
名のはくぬをよはす女も花  
一糸 雨塘

夕とも明く毎き野男よ  
月居

栲恒くさ心抱きや林の空  
夢松

萩を咲きさるの廣り那  
巢也

分申くや日の集らぬ芒の  
蚊牛

あさくほのやめを結る分限る  
素桃

比つら田く見えぬ月の田毎  
榮芽

萩のの萩も江戸ハ角力取  
真之雄

やうき一の林とあけりり芦の花  
双湖

檜宿もさきのほく杜々花の春  
一蕙

は素くとも千きいあは秋の空  
守静

秋の夜はおもはれまきり  
春蟻

やめ原よ野駒く月のつらき  
近江 蝦別

晴や木の多き月を晴る春  
伊勢 青川

近き小村今より夕か  
上総 瓜洲

白の黄葉はくらくかゝる景より

馬明

后臺の中や粧制のかさきき

下寸

獲蘭

遠祐ねん風をゆきよ

野風

軒のく二百十日の昼寐さ

金洞

本陣へのそけき葉の蔓より

上寸

賀厚

焼果を一呼目とつ田中。形

組阿

世を月り少くつ手物の定とぬ

とつ月や崎の柳もあまは

朝つくもほの登りつり草の葉

涪陵

白州 秋野

みよるふるひの身より秋の蝶

露菖

と霜を十五夜あつりし研き

三卷

皮の美を掃くはも糸瓜うか

除来

葉毎く草の帯のこるおや

游砂

秋のうれあの人ぬを高笑

古彦

人よあのをゆきあつるや秋の蝶

花臺

女房の花をゆきあつるや秋の蝶

月の色をゆきあつるや秋の蝶

完呈

るあつるや秋の蝶

く女

清々入子中子もつちかか

夏楓

あふきの晴よるややま

葛志

ほくくし野をり人や杖の雲

北阜

蜻蛉の影し内やあ

汶水

近いらやとち屋えま

楓江

蒼星の海越らん思つた

紫石

旅ふくや月も思つた

里曉

をけふ変はるは秋の蝶

耕壽

をり船一もまほて立り

東陵

と一者し秋定るる川の

扇風

柳すそ新白道言

花扇

高きく荒旭の白よ

村翠

良翁もく纏るや月の花舟

輪之

○ 秋の風火くまもの

肥後 綺石

学もまらうら

一白

山うけも月のさけり

并入

山うけも月のさけり

并入

うて〜 姑も二十はあつた

月取

川林やねんあるはたの人

常陸

得雨

系風あうるはの人もあつた

陸奥

秋夫

隠し子うね白く〜 晴るる

白羽

神秋やあつた尾の出るるそ

東庵

廣庵の浴して居る月夜

駿河

吾友

秋の蚊や川邊もあつた

伊豆

霞江

花あつたあつたあつた

讃岐

朱雁

枯葉のうらみ〜 高〜 林のあつた

能登

破巾

秋の楓〜 白のあつた

筑前

柑翠

月のあつたあつたあつた

筑前

石臈

あつたあつたあつたあつた

石蘭

○

あつたあつたあつたあつた

上総

士朗

躍るあつたあつたあつた

上総

知月

あつたあつたあつたあつた

上総

補賀

あつたあつたあつたあつた

上総

鵬翅

空野の世を掃蕩の光る玉鳥

身の杖折れしも走らん去る

山をめぐりてあはれ杖の夕つか

岩よりほ小あはれつや杖の月

飛てこそ見あはる由年杖あつる

いふはりあや猪道よりほよあ子

秋のうれ人夢のしと馬おぼし

ほくくくあつるのめを居るやあ葉

杖のまゝあつるの風白

玉鳥

天年

眠鯉

蕨石

若人

潮月

故枝

兔遊

秋の暮る鳥一とみよ小風うか

初冬小雀を連て通るりり

秋の暮脊戸く色更きれり

いふはりや杖を見て居る川一里

走る濱やあつるをみて杖の月

秋の杖のやあつるの種はつもつく

黛青

黒水

五璉

几杖

乙二

冬之部

綿ひつつかも店のみか

太節

新嘉や端えはるす畑の古

山松

雪金やまをさるもすや魚く

秀所

みくしけりれまき雪の麓

田岐年

まつ氷風くくふるあふふふ

松琴

まつ雪の柏杞の突赤よ屋根の上

鷺雪

吃裏てを瀬くく雪の向子雪

右圖

廊み前くく積ぬくおの雪

其光

わの家をすかえり記をま

魚房

杞杞のえかろくふる屋根の苔

人充

稲村のくつ積り垣や杞杞の花

素龍

いしあまの世をまつくく雪の雪

暮所

せきすく見ま雪の時るよをむ

梅翠

ククねまあれくやいそまね

沙羅

○

桶のまああれはるまき電

可都里

まつ時る川砂あれ止まら

寥松



さきやいやは日のすね通る海の霞

柑翠

江の芦の葉裏をんききさき

祇文

鶯の屋ふもかりひつと鈴の家

其明

白雪の里うき火おほれど

巴水

茶の花はうつろひてぬ白さき

唼水

春の物さきつとぬおかし

一賀

おしほやれくあつ物さき

完夫

砂ふる鶯もあつとさき花

後素

あさや塘の横は家遠く

魚石

さる川やうちとある松丸太

岷水

身ほくの漣よとつ岸水

踏哉

日や向え移おくと枯野魚

東壽

白雪や月いつこの山へ入

不哲

酒酌の赤人つと雪見ど

卧牛

暮る雪凌ぎびと冬田原

蓼奴

女おも巨燧へ入る詩也

芦潮

ほむ雪や舟の燭と免くる梅の影

左月

ふくしや貝うける遠よ中島の梅

秀賀

白雪やふるふくねて人の川

鼠文

炭竈や束ふハ雪の枝あるも

可笑

当りよふおりの雪のさつり

祇中

野一河孫よ夜業の孫より

穉傘

あゝやめさつねよ路の人

沾國

野の噂うつりまはハ雪り形

故六

雪やふりてさるや夕千尋

昔三

ふらふら人通りくちの月

湖中

枯草やさびしき冬の吹

翠牙兒

冬はる一日積りて止りまら

越后

竹屋

雪も木も瘦て松の志くねる

梅枝

埃ある唐もの店結定らう形

穉雨

あはれ雪の庭も志さふ雲あは

上忍

祇孝

ねの影見つめてまら冬雁

南榮

りや誰一葉の深夜の竹火縄

撫月

うれ草のうけまのむきの巻さ

歡白

雪の日紅一日あはる小坂さ

歡白

有鳥やうもはつそり色

白鳥

水もたふあね月をささく

正母

とそるやみそ路いあの新袋

菅教

物の内くや古院り 片 虎

野牛

餌内く籠女果申く枯雪い

野牛

灯雪く入らさほく新 冬の唄

寒く松

木枯を先りあ宿能翁うか

枝直

あうきや日雪を止んで出

柑翠

と現人のちらんてくるい妻うか

年六

○

轉るくや上野の鐘能古うよとて

護物

春く流よ松の上雪を 冬く籠

成美

風くらる木のく衣や音田川

緑波

終や花くあふく旭て侍

爛

松系を志うれく 月をさ

一輪

賤くあハむく屏風や冬構

鯨波

可くくそそき車うを待るう

棘懶

橋止や吹らうくあを雪おのる

土木

二三 輪体走の梅の咲日す 義勇

白雪やさき世の果ぬ新あり 豊水

里島の薫く世の白く夕時る 霞夕

僕く火の咲く季の小まらふ 載路

姨捨のくれ草のく日向日 彦張 夜阿

旭よる峰くくくれさち教 古人 舊國

○

みく世にくくくくも 花さくくく 青牛

世能中を煙くく言や梅の光 士朗

分入を霍のぬく本くの雪 翠雪

みくくくくや不尽く毎日くくく 上巻 雅達

掃捨く 枯のくくはく神すく月 沿凌

夕くくくれくくく時るくくく 梅隣

くくくも 儂くくくく 不逸

くくくおの 栲の上を 去方

丘里や軒く時くくく 葦山

世帯の 雞ふ果くくく 才谷

はるくくくくくくく 三史

清吟や入口さう也あう海へ、梅曉

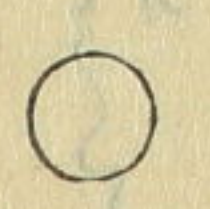
そとを伝あさりの破走やたをり、素泉

石蕨の葉子解のすまや初体る、仙子

明く越す峠くええ雪みらし、輪乞

くお草のりも南へ折より、尾張貞願人

賣るる者、冬の中こちる黄葉、作笠



圓はるもとの雲う、雪かぬ松、不塞翁

分りのハ、ある年、定るえらうか、常陸卜甲

赤馬びう、く、雪くす、夕時る

おすうや月、けつけ、雪をんる、柳枝

赤、よと、りる人、そ人、ある、深夜の梅

門、くの、長を、住居の、蔭る、素谷

志、く、荒く、お、おも、ふく、入、日、直川

あ、る、る、や、月、く、ら、う、つ、待、遠、岬、知水

ち、よ、こ、く、く、踏、も、その、月、夜、さ、得雨

は、く、ら、ふ、く、心、話、を、く、く、お、の、雪、千万里

浪、を、焼、漁、火、凍、く、あ、く、千、雪

海へはさう手きり思玉巖のふ、午川  
連りし夕けきよ冬田我、柑翠  
人きり力冬世の描結鳴きき、古人五明

六ろとまて羽織きりぬ雪とさ、亘姿

一平おるや黄、此もくちる山の隙、江中甚志

草庵や帝子思卯く四目ふる、梅壽

痛のこもあつうや手きり鳴、素桃

志うくも、此や都と夜の雪、波静

冬川や花をもつ本結、新佳味、ここ女

古詩の、と星を思ひきり、水拍、常陸、若壽

こも葉く立葉ふるに草もかきぬ、尊序

情くく、不足らんる者の小書よ、静丸

平おの房小葉のも結く来より、吐山

比よりり夕くぬ流の落葉よ、霞江

夕く倦るあまうらみのるもあし、拍舟

布曲の月より離さる相哉、真向

櫻、此や井のね、初く望の標、宗二

山井くは雪吹く湖の平々な  
 其の夜や馬の事をを裏構  
 山寺や煙あめり冬の月  
 日のわりつゝ暮らす果の倉屋と  
 細代木く月く梅もちおらふ  
 埴埴の目くけ近しぬ世と  
 是を嘆くくくくくくくく  
 山際や氷の上ををを能記  
 是等の嘴つき合は日くらぬ  
 江戸 亞沖  
 淵橋 阿量 車潮 羽朝 吳藍 子鴻 魁坊 梅翠

愁くよ即来始まるる寒々か  
 蘆覚

冬も本まはの冬用能眠るくくく  
 満月の小片く刃たるおねと  
 出羽 杜齋  
 伎師さふらあ綴りぬやま  
 寥松  
 十月の虫を吟中を海くそ  
 祖風  
 志くやや横子押りけの影  
 也夫  
 芦の宿きれ優志うねぬお家し  
 芳明  
 道帆く志くけもんえん冬のも  
 雅進

葉はうらむるお花はくさくさ

里曉

うらぬくともゆく海はくさくさ

露水

仮初の志はくさくさ

兔窟

枯かき草の根はくさくさ

梅枝

月はくさくさ

完爾

吹くくさくさ

可風

去るくさくさ

梅蔭

夕暮はくさくさ

李洞

人志はくさくさ

木の根はくさくさ

一兩

舟もりの丸はくさくさ

可羅保

炭子前はくさくさ

完未

古き感はくさくさ

寥松



春之部

十五、踏むに花を梅の春 音牛

花の死をよよと嘆くを 廖松

春の光引くつらき花の山 梅翠

黄き中夜を啼くは家のか 雷地

はる風やきこす隅田川 文鳥

あけぬえん家あり枕の花 魚房

地燈の光えそ美し草草 汶上

り有のあと跡やうきふり 祇文

皚々素足は若やはる能言 吐雲

口もぬる物や梅の花 巴水

ふく日能あつて白よ梅をか 豊和

鳥はわたりて梅のちる 常水

つ羊を斗くをう 白水

淡く霞のまをさくるの隠 風登

あるも人の見えたり春の山 尺素

白の月や雪をさるるは晴 完甫

あけぬえん梅の花をよ 岷江

東嶽の海めりもかくもなる也

東嶽

北の道も夕涼草の海

南斗

謀の業やる中におも能くさ

土木

多ふこくりや世の下の流を

大字

百姓の面西

仙李

少く見るとも出づる所の標

萬古

新起の世を良とるや世の如

卒居

光る子も後ふ光の留居か

谷雲

ふ吹のほく輝きと照りたり

東陵

新のるや少く後にも集りる

耕壽

梅の葉あたら老ふと吹色

竹風

手とぬや霧の集る山の原に

磯丸

山寺もあけよ梅く後る月

孤舟

片く花や月の見えも指りり

東湖

朝日の暁くも花片く子

鼠肝

春の日や女中一能島仕る

了輔

夕片く霞あつて疾く

雪菊

獨のをかきくる事の形 江戸 普成

花く懸撰集の世よしれんと、 普山

朝はららんぬ世の中ももれんと 其由

未ふらうと旨咲花を生ますか 雪珊

天空の橋もあん橋り早 子蘭

佐和のけしも春のけし清く取 秀所

草もや水の花もあん橋り早 山松

雲さやいつもいと梅の玉簪 松琴

舞雲雀敬亭山のひらりと 籬声

梅さや新りあのつらうとそ 申次

山采をさる雀もあん橋り早 時九

花く鐘つれ伸もあん橋り早 萱雅

山采をさる雀もあん橋り早 昔我

亡人を幸しく暮るはららんと 光拙

親船の宿もあん橋り早 卧牛

山采をさる雀もあん橋り早 梅翠

鳥さららんぬ世の中ももれんと 牙心

鳥さららんぬ世の中ももれんと

鳥さららんぬ世の中ももれんと

鳥さららんぬ世の中ももれんと

鳥さららんぬ世の中ももれんと

内さきさき梅の旭や根が古

恒九

春風や流るも吹きや雨を川

大節

舟よの恋かよ成の舟杖まゝれり

百舟

世ふきやうつふ来て絶あ晴

翠兄

嘗の徳や〜ま 軒の苔

南山

焼せ夏甚一も〜吹れり季

羽仙

真心の花見よりを福さん

之綱

ワ〜を退ふ〜海原を越る時

美都良

夢りの空〜志える小昼迄

一之

黄鳥や流る暇〜

輪之

海里や花より〜

翠雪

立際り車合や〜京の心

一茶

花ら〜る〜

胡蝶

梅子や〜

寥如

梅〜り見ゆる〜

梅翠

はる〜も〜

長齋

ま〜柳や〜

李塵

不尺の山梅のまじり

真之雄

草の月影に申する

一蕙

はみくもあはれ

森々

夕暮今や秋を

研石

とわりのこも

秋友

昔の良を

既醉

月影を

眠石

物うら

仙風

層々つや

常陸

雪の雪月

酸河

人々の梅

古人

梅枝くや

雲水

子水先よ

志圭

人柳浦

兩塘

花影

長翠

花影

具々

花影

梅翠

花影

都本

夕富士の清跡をゆく 初雪

此若

しり傳きあふるくしり 雪の霞

緑波

る揺るそよやふいさ見え暮のる

爛く

よら梅子ほのり梅のおゆさ

一輪

を山や雲遊れぬ夕暮色

驚波

元あゝぬ花一山のおる

河洲

塔のそ花は毎時をるるの形

兔七

莖野やあゝ念をるる二子止

波静

海ぬのはやむ暮ハ人のまの心

帰調

ほのくれき松も揺るはる清海

双湖

来そ如錦よも雲采の忍 摺

栄芽

ひささみんゆはつるは和

童和

粗度や見えあふもあゝはち

薬圃

お吐く出おりけやあゝの月

雨院

川原麓の雪をるつらん春のう

村翠

くゆる飛葉をいもんを東山

碩布

る今の中を信しよ 初はら

音岐

ふめ流の余をえりておのる

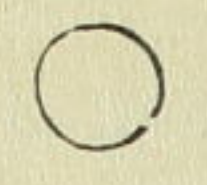
春蟻

枕



車もろや中も花もつ小舟よ  
 らく内々夜も物もやひまれ  
 雉もふややすと風の家を吹  
 号うし床息もさる戸口  
 花益むむも誰も持うり  
 はく風や馬うらうら小松原  
 川もや埃のうまや造り花  
 垣根ふる鶴う二月の旭うふ  
 花垣の底うい終ん花七日

公木  
 白騎  
 鬼雀  
 常陸 左月  
 薄雨  
 起鳳  
 其堂  
 日向 月化  
 翠布



花を見るむも親もさへえぬそ  
 花の日や履も愛ふる履造る  
 山棧はうい人車も那  
 夕曇りや片ぬる舟の釣小舟  
 勢ふるおふきありけり椿  
 七種やもつたあしる幸の風  
 夕月のうつる山田やさく性  
 乙子ゆらめきの軒う見えぬん

みる春  
 亀山  
 音三  
 上総 三壽  
 白井  
 浩凌  
 女 竹し  
 素遊



老婦も幼子や志々たる車の風、  
日の本ハとも恋の春あつた、  
いんくく教へくく涅槃ぶ、  
朝ふく時久く異の境と、  
所詮なく折を控へうや路の梅、  
雪をくむ日を白梅のまきの形、  
糸のらや玉のまきのまのくら、  
昔も日和もあつたあつたあつた、  
日の梅がくくくくくくくくく

巴山  
満枝  
可笑  
紫曉  
銀沙  
唸松  
花遊  
三史  
鳥氣

くく子や大口めくくくくくく  
夕東風や何れも白吹きくく  
あつた御す月の夜はもるや梅  
川原をくくくくくくくくく  
巖五把翹子路くく梅家さ  
新風や吹電て梅咲くくく  
くつ花をくくく見ると思ふ也  
柳、けあきの聲響はくくく

完文  
吳逸  
三千磨  
梅曉  
斗橋  
文蝶  
櫻堂

○

三

葉子の庭を多つてくちやうり

治凌

草の戸や岸をえびて人出入

甫尺

昔たるとも一箇一葉の夢

琴奴

雲の梅咲はもも糸の浦山

東車

後こそ思はる世もさうし

朝鳥

胡麻をまく日はあつり寺男

茂挂

田中へつりあ白雲を似てる

勇貞

ぶちやをくもる記おれ湖

白鴉

雪のうけ白尾の居る車日

壺仙

可やくと直を海に猫の姿

午川

捲る寸花石のうけの横うか

菊我

葉のうけ破子のうけをえける

、

夕や雀なくや日をもつおの上

琴路

朝月を柳をくらえて静く

和扇

植ておけ咲くら菊の名を人

湖東

花の夕下戸を馬をて居る

、

おしりもあつてを居るさう

知水

はるのおきとておれさう

左丈

木のふたおつまらぬ桂  
山の中や紅葉のついでに  
つれ先くさくさむはる世  
空にさやけの中  
里居りて黄葉のさうさ  
も風や丹波のふたの碓  
はんぬる居る田螺の倉庫  
独居るもさやけの中  
白き花をさうさ

中書

一川

蕉西

龜毛

雜口

薦花

柑翠

虎未

○

はるを見申電柱の張曲  
梅香のさうさ魚の目  
紫の戸や雪とつれに  
梅のつれにさうさ  
あはれさうさ人さうさ  
雁のさうさを雁のさうさ  
弱の眼さうさ角のさうさ  
春のさうさをさうさ

真水

枝直

平橋

東驍

馬明

蘭車

月泉

大田

春のふ編唐椒なる朱ぬ  
去を里能の集をよき梅うな  
見ぬこしきまはらうはるの正  
馬の子能眼もつ開ぬよ家極  
ふともよま江終の折う家  
柳あうくるさつて雲の終爾  
紙のあつてつて雲くも開うか  
春の日は日帰る旅のまをすら  
籠子あくや斤元ふよ能あり

樗村

眠鯉

和風

竹風

野牛

故技

兔游

五連

鳩丸

夏は清物の川方よはのう梅  
中庭へ船流しをよけの妻  
志つうふるおは花ちの薨りか  
石りし懐いつるを夢を吹ぬん  
此をよきもつんまぬ柳よ  
ハ重極あるううおはまもさう  
元日もさる申く草の鹿うか  
起くくく花えり里の菜汁さ  
習ふあうとやひくくまをさぬ

潮月

紙中

くま女

芝童

方壺

几杖

成美

士朗

林翠

夏之部

花のつぎやをいふの舟

吳山

みくさのりしを推のこられ花

成美

昼のふ 鶴をよさくよふふ

三花

かつふをいふしつをふおり

楚志

夕白や 鶴をいふしつをふおり

梅壽

おもたし 鶴をいふしつをふおり

右雄

いそくのふのふをいふしつをふおり

下

雀鳥や さらつしつをいふしつをふおり

三時

破瀆の 鶴をいふしつをふおり

梅戸

片里や 鶴をいふしつをふおり

棋琴

葉玉や 鶴をいふしつをふおり

獲蘭

むらさきのふのふをいふしつをふおり

喜羊

咲牡丹鳥の口より余るふか

浙江

いふおの花をいふしつをふおり

蒼虬

夏あけしつをいふしつをふおり

青牛

かきんはしつをいふしつをふおり

翠松

かつ即しのくさきを採る是より 大坂 八千坊

川より肩帽子を免て市後より 加賀 既白

輝飛や景を予ふよの朝日新 對馬 関山

な山や雉子のわろし梅更む 播磨 布船

る市や賢更の栴恒もふし 草石

まの柳も新てき曉く 鶏声

湖より住色もあふ家の月 木奴

まつ松美人もくぬ小あふふ 時丸

六よりあつて暮のつくは水より 蒲丈

夕まやまはし草のすし 甲斐 嵐外

あふる魚も串よりきん和氷鶏 乙吉彦

子供ホる正月するや 信中 蕉雨

幕よりあふる 輪之

都より大けり 湖中

麦よりくく 素中

恒牛の早き 起鳳

叢り鳥字のぬれ葉や入梅の月 陸奥 乙調

ウ六

ちるるねをこし余しるる中庭ぞ

尾張

羅城

花鑿粟とらふをサ(その)るる

竹有

此角あすきやいれ葉の夕暮

出羽

民曉

あけ余るるちをさきつ霞の峰

陸奥

投雪

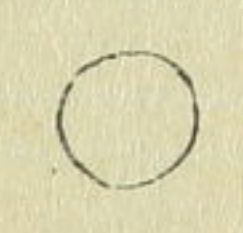
あけけつつみ赤くとも霧の足

川す員入の昔舞一咲よりり

一茶

うらぬ家や果ふ乃のおとり竹

一白



四月片く山棠標の一葉さ

以足

笠の家や筆の先をきけふ

大節

昨日ももりかえりも嬉しう花

吟水

美人を擇むめを牡丹を

眠石

やまのぬを面白くして軽舟が

酉水

はるる纏やとるる枝は九つ鳴

文龍

蝶のあけねをさるるのちねり

斗檜

風とら木移るあや夜の蝶

扇風

霞くくワ葉しみるる字部の山

花扇

垣道の松の赤なまきり

持翠





去年秋よりわらわぬ山子規

素迪

風の平福山止まり見ゆらば

完尔

葉柳うしろを金くし旅道る

夏風

浮草をあらはせしむる情男うか

野翠

夕餉う河楚へまや閑古鳥

金洞

界城す子のうけり羽ぬき

祇孝

山百合もむねのはさみよこさる

其月

秋桂う二日乃月のをさ情とぬ

素泉

はくくともあら田見とぬ夕うか

撫月

春ことこのと管一う春の秋

一川

う札あくや船のとり跡う改

去刀

新さや涼しはやぬも角田川

斯民

白草秋や川よ挽うつ虫能人

完里

お粉つけそ竹筒鳴ふ女う南

光松

早くとはれを来とすま簾

雷如



草むしの蜂巣をちて暑うか

完来

火曜はく小娘あき春の秋

常水

静しとくく多飼ふ且り形  
 不ぬ均青り却れん塔の鈴  
 五湖へ花浮て出りう本となす  
 あり鶴なく農家の脊や手操舟  
 かる漕はあり鶴きうあ夕ふふ  
 昔のう能戦く空りや昔唐々  
 きの海くつしきもあう光り  
 能お翠のうしを海をんをり  
 白るや風はく通るうの音  
 鶏丸  
 芦人  
 芦潮  
 豊玉  
 雅進  
 四明  
 蓼以  
 踏哉

かつの白人目も字も静し  
 雨の戸や鳴きそる記垣子  
 夕うけやその日く能物為  
 信濃  
 雲帯  
 田雀彦  
 磯丸



かつ水日のてるけあのか地よさ  
 月をまきし是あといの物鶴  
 飯をばや色雀火に跡る鈴の尾  
 物りあうけすえる夕も霞  
 西のふやねうけ度よる非乐  
 江月  
 藤傘  
 江月  
 蕨石

東の戸の明く夕顔の小家うか  
 家々一丸のちきり記堂りね  
 夏のそと大和系供て明る也  
 東まつとと藤もぬ色をあらうり  
 沢を火串川を軒舟りうとと  
 舟をふくや田一り堂低う飛  
 ちまつとと花もさる堂のふ  
 山百合や蒼もうれととをまの  
 夕羽涼ちるハ柳の松の葉う  
 山曉  
 錦柳  
 道明  
 冠川  
 花遊  
 不逸  
 古彦  
 此君  
 泊國

壺止の名をうとと夕すこ  
 人あれあ表の明ておる四月さ  
 志しとと身もあやや新あや免  
 小松原子規うハ修色一  
 卯の花やあよ福れハ風見申る  
 風節の見えそなうとと田さ  
 葉もこれおとと脊戸の子規ふ  
 五月もを換もあややふとと  
 けいふれのおととをまもん竹の音  
 護物  
 やとく  
 三平磨  
 竹里  
 文紫  
 弥九雄  
 溜橋  
 露水  
 雅山

○

らんこもあま外はハ色あふ

素郷

う都の結早稲冷蔵くあま田さ

静丸

かすすむはあう原川の字一舟

素谷

大竹よ傳くあまうこまのる

常陸

里枕

あつらや柳の下結田子あ

、

栗うや夕まあしてああう先

鮎國

白るうまうまつ去の白形うか

瓜洲

木やま壬生の小猿う斬う形

露菘

夕顔や移見て居る花の中

芝豊

ほまくとあま田んてあま夕うか

撫月

抱籠り裸をほらぬ暑うの形

上総

呉扇

夕負の花子科あを葉あ

あまうま草うあまうあまの南

枝直

朝の露のあまうあまうあま

寥松

あまうあまうあまうあまうあま

、

あけ遅や瓜あけある花の心

嵐雪

草の心を拾ひあけけよせ風の玉

海霞そあけりよ草うはあけりり

吏登

花もあけ夜はかのくもあけり

山里や桃うけけあけ志は若

葵太

白草あけ人うけさるおあけり

掃きもやアえてあけ夕もあけり

あけあけりのさうりりあけあけり

いふあけそま人のあけりり  
あけりりあけりりあけりり  
を同じあけりりあけりり

火あけあけりあけりあけりあけり

巴葵

あけあけりあけりあけりあけり

鷺泊

字の名あけあけりあけりあけり

玉峯

あけりりあけりあけりあけり

白文

あけりりあけりあけりあけり

頭吾

○

香るんを里の灯をくつさけり

岷江

やうの夜は山ありく鹿のさる

五陵

うさりの重なるてある枯野さ

其陽

菜の花を山をに見せり子

雷斧

被るる柳へさいる女うぬ

清と

うさくさくと羊もなれえさく

波江

鳥ふぬの聲響も交るや物あり

栄白

晴晴るも光る光りく三日の月

清休

よきことよ羽のくつほのそひえり

石意

さるるぬふく梅雪のうらさ

知廣

かきる火やうらわのほは濡ふる

三蝶

桜はくまを眠るる光えり

也水

物思ふ月の夜さくさく一人

玉斧

○

そくつ灯もまくれさよ草の中

加賀 佛仙

花の枝や梅のふれ梅一枝

江中 奠文

鐘をくつ梅草ちや羊の市

吐月

思ふて居るる月、  
山幸

書もつたるる月、  
阿人

梅の香や梅の影、  
門琴

火の輝く月、  
素綾

有りて第の浦、  
見村

紫陽花や衣を、  
美丸

舟の影、  
舟

舟の影、  
一雙

舟の影、  
白麻

舟の影、  
鳥明

舟の影、  
秋瓜

舟の影、  
存阿

天保三壬辰年

求左村

今堂氏

求之

惣三郎



